

教職大学院

Newsletter

No. 26

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2010.10.23

未来につながる確かな歩み

2010年1月12日ハイチでM7.0の地震が発生した。地震の規模とハイチの政情不安定に起因する社会基盤の脆弱さにより、死者が20万人以上に及ぶなど近年空前の大規模災害となった。

私は、3月にハイチへ向かった。生きることへの希求、無秩序の中の秩序、最低限の生活、人間の尊厳、常に目の前にある限界……すべてが衝撃的な出来事だった。

生きることへの希求

「ハイチには自殺をする人がいない。自殺という言葉がない。」とハイチの日本大使館の方が語った。そのとき、我々は何故日本には自殺が多いのかと話し合った。地域性や気候の違い、物の豊かさ、社会構造、子育てについて、人間関係の希薄さなど自殺の原因は多い。そこで、では、何故、ハイチには自殺をする人がいないのかと質問した。「ハイチの人々は生まれたときから生きることへ一生懸命であり、どうやって生きていくかしか考えていない。親が教えるわけではない。親も生きることへ一生懸命である。そのような環境の中で子どもたちは自分たちなりに生きることへ身をつけていく。」これが答えだった。ともかく、これだけ甚大な被害であるにもかかわらず、ハイチの人々の生きることへの希求はすばらしいというのが、私が一番強く感じたことだった。

そういえば、ハイチの17歳の少女も地震発生から15日ぶりに救出された。そのときに、フランスの救助隊員は「奇跡だ」と叫んだ。何故生き延びられたのかについて、誰もが疑問に思った。しかし、今、私は、それが奇跡ではないと感じている。奇跡というよりも生きることへあきらめなかった。生きることへあきらめないことが日常生活そのものだったからだと思う。

地震発生3ヵ月後、ハイチの人々は、連日35度を超える暑さの中、テントもなく、炎天下で地面にシーツを敷いて寝ていた。食事は午後3時に豆ご飯の1食だけだった。限られた水で洗濯をし、身体を拭き、食事を作る。大切な食料である

福井大学医学部看護学科教授 酒井 明子

にも関わらず、救援者である我々にもその食事の一部を分けしてくれた。家族13人が狭いテントで重なり合うように寝ていた。子どもたちは、手作りの凧をあげて遊んでいた。子どもたちは、我々に多くの質問をしてきた。「日本はどんなところ?」「日本には何故地震が多いの?」「地震があったらどうしたらいいの?」「日本に行ってみたいな」。子どもたちの目は輝いていた。海の向こうや遠い未来を思い描く透明感のある目だった。劣悪な生活環境でありながら、豊かなところで生きていることが感じられた。

私は災害看護を専門領域としている。このような現場からの学びを通して、学生に伝えたいことは一つ。「いのちの大切さを伝えたい」ということである。ではどうやって伝えていくか。頭でわかる、知識でわかるということと、腹の底まで響いて、全身で感じるということとはまったく異なるものである。また、全身で感じてはじめて、次の自分の行動に生きてくる。そして、本当の意味で知識、知恵となる。それが、専門職である看護師としての実践力形成につながる。そのためにも、災害現場はどういうところか、被災者はどのような体験をしているか、今何が必要かをここに響き、身体に染みつくように伝えたいと考えている。

途絶えることのない確かな歩み

我々が感じている現実、途方もなく無限の彼方から流れてきているものである。日本の教育を真に考えようとする多くの人々の思いが、はるかかなたから途絶えることなくつながってきたものである。根気や粘りや地道な努力が今日の教育を支えている。その一つが教職大学院での取り組みであろう。私は、今年6月に福井大学ラウンドテーブルに参加した。そこは、多様な背景を持つ人々が交流し、歴史的・文化的・社会的な背景を広い視野で捉え直す場であった。実践を自由に語り合い、互いに学び合いながら、日本の教育を自律して考えていくことができる場だと確信した。そして、未来につながる確かな歩みの1コマがこの通信に綴られている。

内容

未来につながる確かな歩み (1)
第20回日本教師教育学会に参加して (4)
拠点校・連携校だより (7)

フィンランド訪問記 (2)
第32回福井県養護学校教育研究大会分科会が開かれる (6)
教職大学院報道ファイル (12)

フィンランド訪問記

福井大学教職大学院 津田 由起枝

直行便で9時間半、降り立ったフィンランドのバンター空港は、まさしく深まりゆく秋（日本の11月初旬頃）の雰囲気、やや肌寒いが予想よりはるかに暖かかった。空港では、今回私たちと同行するメンバーで1週間前から欧州入りしていた、南九州大学の黒木哲徳人間発達学部長と同大学の趙雪梅さんが迎えてくれた。さらに、ホテルではあの懐かしい（昨年、至民中学校でお目にかかりお話も聞いたので）ハッカライネン・ミルダご夫妻と再会、趙さんの巧みな通訳で挨拶を交わす。1日目はフライトの疲れと時差で体はくたくただったが、明日からの訪問に心が弾んでいた。

2日目、早速最初の訪問校に出かける。フィンランド中央駅から列車に乗り、ヒュビンガーというところにある幼稚園から高校までの一貫校を訪ねた。かつて人々の暮らしに欠かせなかった馬が銅像になっていて私たちを迎えてくれた。ここでは、4～8歳の子どものための幼児教育と中1の理科の授業を見せていただいたが、特に幼児教育が目をついた。森の精に扮した教師の語りから始まり、影をなくした森の精へのかわりを異年齢の幼児たちで考え、創り上げていく授業だった。その中には小さな先生（同校の小6の児童で、幼児の面倒を見ることが単位みたいなことになるらしい。日本の職



場体験に当たる)までいて驚いた。その後の意見交流会では、フィンランドの教育の実情や創造力を高めるための教育の取り組みについていろいろお聞きすることができた。フィンランドでは、国の統一的教育システムの下で市町村の教育方針に沿って各学校が独自の教育を行っていて、「学士+修士」の資格を条件として全国共通の力量を持つ教員による高い教育を施すことをねらいとしているとのことだった。教員は若い女性にとって「なりたい職業No.1」であると聞き、うれしい限りだった。

その他にも、ナラティブラーニングはペンティ氏（ハッカライネンさんのこと）が創始者で1999年からこのヒュビンガーで始まったこと、作成されたガイドラインを市が受け入れることからスタートしたこと、かわる先生たちがアイデアを持ち寄って創っていること、4～8歳までの子どもたちの本来持っている力をどう伸ばすのかについて一貫してサポー

トすることを目指していること、この地域では26校のうち4校がこの教育に取り組んでいるが、一般的には5歳児まで・6歳児・小学生の3つに分断して行われているところが多いこと（3つの運営母体は別々）など、多くのことをお聞きできた。国が教育に熱心な理由は、フィンランドの持つ歴史的背景（ロシアやスウェーデンによる長きにわたる圧政）が大きな要因であることも分かった。

4日目は、フィンランド中部にあるカヤーニに移動し、オウル大学カヤーニキャンパスを訪問。ペンティ氏の案内で大



学構内を歩いてみたが、きれいに紅葉した木々に囲まれ、建物が自然の中に溶け込んでいるという感じだった。ここが近々閉鎖されると聞いて、とても残念でならない。途中立ち寄った教会近くの地面でもキノコや野いちごが至る所に自生していたり、果実の木が歩道近くにさりげなく植えられていたりして、まさに人間と自然が共存している街という印象を強く受けた。

5日目には、車で70～80km離れた地区にある0歳～就学前までの幼児教育施設を見学する。ここでもナラティブラーニングが実践されていた。先生の静かなお話が40～50分も続いたあと、いきなり乱入してきた森の動物に扮した園長先生が謎かけのような演技を繰り広げ始めた。食い入るようにその姿を見つめ、動物の園長先生を囲んでみんなが口々に話しかける。完全にその世界に没頭している様子だった。その後、子どもたちの豊かな体験が園舎いっぱい広がったことは言うまでもない。先生は問題を投げかけてはいるが、そこからは子どもたちが自由に発想し、考え合い、助け合って解決したり、創り上げたりしていた。ストーリー性のある見事なプログラムだった。

この学校では、ディケアセンターの役割についてお聞きできた。日本での意味とは違い、幼児教育の預かり保育のような意味で使っていた。州や様々の趣味を持つ地域の各種団体な



どが運営して放課後の子供を預かるシステムで、これもペンティ氏の発案でスタートしたらしい。本学の新大学構想も地域のコミュニティ養成が課題（そこに大学がどう絡むか）と聞かすが、大変参考となる実践をお聞きすることができた。

6日目、今度はやはりカヤーニにある、全校が60~70人と



いう小規模の公立幼稚園を訪問した。ここでも例の通り今度は迷彩服に身をまとった木こりのおばさんが登場、やっぱり子どもたちをその

気にさせる問題を投げかけていた。この幼稚園が他の幼稚園と異なっていたのは、そこから後の展開だった。子どもたちはヒントになるカードを手に、園舎の至る所を探検に出かける。そこで出会ういろいろな大人に聞いたり手伝ってもらったりして自分たちで学びを勝ち取っていく。そして、その後は、園舎を取り囲む雄大な森と林に遊びが広がり、自然の持つ不思議さや豊かさを学習環境として学びをさらに深めていた。この幼稚園は、小規模で自然が豊か、しかもデイケアのある幼稚園ということで、ナラティブラーニングが一層やりやすい環境であった。例えばドラゴンの物語を創る学びであれば、子どもたち自身が本から想像力を働かせ、周囲の自然を巻き込んで展開できる利点を持っているということだ。先生は始めだけかかわり、後は子ども同士が助け合ってどんどん展開していく。そういう場を保障できる幼稚園だった。



7日目は、最後の訪問として、大学の附属実験校に出かけた。ここは7つの市の教員養成の実習校になっていて、教員も大学の教員として採用されていた。集会や式典ができる多目的ホールや男女別の体育館、セキュリティが行き届いた施設設備で、プレイルームなどで思いっきり遊ぶ子どもたちの屈託のない笑顔が印象的だった。

8日間という長いような短いような訪問の中で、いろいろな出会いも体験できた。まず、ペンティ・ミルダ夫妻とその友人の方たちと出会い、それぞれの自宅でおもてなしを受けた。日本からの院生夫妻も生まれたての赤ちゃんを連れて来てくれて、いろんな話に花が咲いた。欧米では男性もエプロンをしてキッチンに立つとは聞いていたが、ペンティ氏も例

外でなく、自らじゃがいもや魚の料理を作ってくださった。暮れゆく北欧の淡い光をバックに、みんなでいただいたムイコ（小鱈のような魚）やサーモン、じゃがいもやチーズ、そしてパンのおいしかったこと。



そして、食や生活を通して様々な異文化とも出会った。北極圏に近いこともあって、トナカイが身近であった。2日目に4人で出かけた郷土料理の店では、日本語版のメニューに「肉料理ー野生の肉ー」と書かれてあってもしやとは思ったが、案の定、トナカイやヘラジカの肉がどぼっと登場した。その後いろんな所に出かけたが、スーパーでもホテルの朝食でもさりげなく置いてあったので、ここでは日常的なのだと分かった。トナカイの角は屋外マーケットなどでは民芸品、皮は革製品として売られていた。街を歩くと、ヨーロッパ的な雰囲気とアジア的な雰囲気の両方を感じる。建物や生活様式は一見するとヨーロッパ的だが、よく見ると中央アジアの雰囲気も漂わせているし、実際行き交う人はヨーロッパと中央アジアを合わせた面立ちに見える。つまり、ここは東欧諸国と同じ、ヨーロッパとアジアの接点なのだ。

お招きを受けたカヤーニキャンパスの教員のコーヒータムでは、奇しくも退職するミルダさんたちの送別会が行われ、ここでの思い出に涙する彼女に出会うことになった。オウル大学は、カヤーニキャンパスを附属実験校も含め廃止することを決めた。夫妻の活動の拠点である施設（Silmu-麦芽の意）にはキャンパス内の教職員・学生が抗議のデモ行進したときのプラカードが置いてあった。リトアニア出身の彼女は、祖国で、また国際的にも多くの活躍をされることだろう。ここでお会いした教授たちには、本学の署名にもご協力いただいた。大変厳しい時期に暖かく受け入れてくださったご夫妻に心から感謝したい。

言葉こそうまく通じなかったが、肌で感じた異文化や片言の触れあい体験は、今、私の中で大事な財産になりつつある。この訪問で見聞きしたナラティブラーニングをはじめ、フィンランドの教育が今後目指そうとする姿を、日本の教育の中で、是非、具現化していきたいと改めて感じることであった体験だった。



第20回日本教師教育学会に参加して

福井大学教職大学院 森 透

9月25-26日(土・日)に東京の日本大学文理学部で第20回日本教師教育学会が開催されました。学会は会員数が約1000名で、研究者や現場の先生方、及び看護・福祉関係者が加入されている学会であり、当日は300名近い参加者がありました。福井大学からも発表者も含めて数名の参加者があったと思います。この学会の研究者は国立大学だけではなく私立大学の会員も多いという特徴を持っています。

<鈴木寛副大臣講演と公開シンポジウム>

1日目の午後が文部科学副大臣の鈴木寛氏の講演と、それを踏まえた公開シンポジウムが開催されました(全国私立大学教職課程研究連絡協議会が協賛)。学会が副大臣に講演を依頼したということもあって、会場には200名以上のあふれんばかりの参加者で埋まり、関心の高さが伺われました。テーマは「教員養成の高度化と専門性・多様性をどう確保するか」とくに教育実習の長期化をめぐる。最初に副大臣が約1時間講演され、そのあとは研究者3人によるシンポジウムでした。

鈴木副大臣の講演は非常に熱い語り口で日本の教師教育改革について参加者に強く呼びかけられ、最初に、学会というアカデミアに招待されたことを大変光栄に思う、という語りから始まりました。講演の途中でフロアから不規則発言が出されたことは大変残念に思いましたが、そのフロアからの突然の質問に対しても、否定するのではなく大変丁寧に対応し持論を展開された姿勢には共感しました。講演内容は、今年2月に福井大学で講演されたものと基本的に共通するものですが、特に学会というアカデミアやコミュニティの果たす役割を強調され、学会での「熟議」と具体的な改革プランの提案を切望するという姿勢が一貫していました。

予定の時間をオーバーするほどの熱の入れようでしたが、講演後、鈴木副大臣が帰られたあとは、添田久美子氏(愛知教育大学)、松木健一氏(福井大学 j)、牛渡淳氏(仙台白百合女子大学 j)の3人によるシンポジウムでした。テーマはそれぞれ、添田氏が「6年制教員養成カリキュラムとその中における長期教育実習の位置づけ」、松木氏が「1年間の

教育実習(インターンシップ制)について」、牛渡氏が「アメリカの修士課程における教育実習の例—教員養成の高度化と実践的力量形成の仕組み—」。

添田氏は愛知教育大学の教職大学院の事例を、松木氏は福井大学教職大学院の1年間にわたるインターンシップのシステムと実際について、牛渡氏はアメリカの教師教育にふれながら実践的力量形成の仕組みを報告されました。

全体的に、学会として教師教育をどう考えるのか、特に大学の学部・大学院における教員養成のありかたについて深い議論がなされたと思います。時間的な制約はありましたが、特に福井大学の事例が、副大臣も固有名を挙げて評価していることもあって、参加者の関心が集中したように感じました。長期にわたるインターンシップの実践力の質をどのように評価するのか、教員養成のスタンダードの課題と関連させてどうなのか、開放制の議論のもとで私立大学も含めて4年プラスαをどのように実現していくのか、等々の論点が議論になったように思います。

<個人としての発表>

あとは、個人的ですが、私自身も2つの発表を行いました。1日目の午前中の分科会で昨年に続いて2回目の発表(題目は「附属学校園における教師の協働研究(2)—福井大学教職大学院の拠点校として」)、2日目の午後の課題研究「大学院における教師教育」で、「教師教育における『省察』活動の意義・実践・課題」と題して、福井大学の1年間の省察活動について発表しました。

<来年の学会開催校は福井大学>

来年の第21回大会は福井大学で開催される予定です。日程は来年9月17日(土)-18日(日)開催予定です。注目を集めている福井大学の教職大学院を学会の皆さんや日本中の研究者や現場の先生方にアピールする大変よい機会だと考えていますので、開催準備等大変になりますが、関係者の皆様のご協力をよろしくお願い致します。



鈴木寛文部科学副大臣



松木健一福井大学教授

研究者はどう応えるか

鈴木寛副大臣は学会での基調講演の中で数々の印象的な言葉を述べていた。鈴木氏の語りを脳内メモから引き出せば、「これからは霞ヶ関の閉ざされた空間ではなく、開かれた公共の『熟議』から教育政策はデザインされていく」、「教育改革については、『アカデミア』の中で議論を交わしたい」、「皆さんからぜひペーパー（論文）で意見を寄せて欲しい」と、学会に対する霞ヶ関からの情熱的な歩み寄りのようでもあった。

ここで副大臣が述べる「アカデミア」の議論、これはいったい何を意味するのだろうか。「不確実な言説や一部のイデオロギーにとらわれず、科学的かつ論理的に導き出された研究成果をもとに更なる真理の追究に向かって自由に議論を交わすこと」、そういう解釈で正しいだろうか。ならば、学会に限らず大学などの様々な研究コミュニティが「アカデミア」を自負する以上、それらはおそらく「十八番」だと言える。

しかし、ここで敢えて警鐘を鳴らしてみたい。大学や学会などの研究コミュニティですら、専門職セクトと同様、物理的および心理的な閉鎖性の病に感染することはなかつ

福井大学教職大学院 篠原 岳司

たか。過去を振り返り、研究者が「右」「左」と互いの立場を確かめて議論を戦わせていた歴史もなかったか。研究者自らが「思い込み」や「誤解」、恣意性や政治性に囚われないうよう、自らの研究コミュニティをどのように再考してきたか。

教師教育改革の転換期である今、研究者とそのコミュニティもまた教師や学校と同様に自らを公共に晒し、異質な他者との交流によって省察しようとする気概が求められている。政治に対しても科学と真理で応えるという理性的対話、そしてそういった研究者の構えとしての「理性」が今も変わらず求められている。基調講演では副大臣が囚らずも胸襟を開き議論を求めてきた。このこと自体、政治の変化、時代の変化の象徴かもしれない。では学会はそれにどう応えるのか。研究者はどう応えるのか。そんなことを考えながらの帰りの道のりは、往路に比べずっと近くに感じられるのだった。

福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター 大和 真希子

この学会での発表は、実に数年ぶりになるだろうか。幸いにも今年、2つの研究発表の機会に恵まれた。以下に、2日間の学会参加記を簡単ではあるが記しておきたい。

まず、自由研究発表では、福井大学で実施している免許更新講習必修領域の取り組みについて報告した。フロアの反応からは、「少人数グループ形式を導入すること」に対する驚きと、省察プログラムへの関心の高さがうかがえた。それを裏づけるのが「書き、語り合い、聴き合うことが省察にどう結びつくのか」「このプログラムの『目標』は何か」というフロアからの率直な質問である。この声が、学会員であると同時に講習を担当する側である多数の大学教員から出たことはきわめて興味深い。批判の多い免許更新講習を「意味のある時間」にするために大学は、何をすべきなのか。限られた質疑応答のチャンスではあったが、この問いをフロアにいる人たちと共有し、試行錯誤することができた有意義な時間であった。

翌日の課題研究発表では、「教師教育における『実践』概

念」というテーマのもとで報告した。1980年代、「実践」や「実践的指導力」という言葉が、なにゆえ政策上に登場するようになったのか、わたしたちは日常的にこれらの言葉を用いがちだが、それゆえに、「実践」を捉える際に見落としがちの部分があるのではないか…という問題提案を試みた、つもりである。参加者からは『実践』と『実践的指導力』の意味内容をどう整理すべきか「実践的ではない指導力などありえるのか」といった疑問や、「実践とは、まずは目の前の授業ではないのか」という声をいただくことができた。そして、報告者であるわたしが、自分自身の「実践」を再考していない、という発見に至った。今更ながら、これは驚くべきことである。将来、教職を目指そうとする、あるいは目指さない人たちにとって、一体わたしはひとりの「実践」者としてどんな「実践」をすべきなのか。「実践」とは何か、というシンプルな問いのスタートラインは、自分の足元にあるのだ。2日間の発表を終えた今、そんな思いでいっぱいである。

第32回福井県養護学校教育研究大会分科会が開かれる

福井大学附属特別支援学校 水野 雅人

8月6日の午後、福井県養護学校教育研究大会分科会が福井大学で開かれました。この研究会は県内の養護学校の教育研究大会で、本年度は附属特別支援学校が事務局を担当しています。研究主題は、「一人一人の教育的ニーズに応じた支援の在り方を求めて」で、研究大会の全体会は10月に本校を会場に行いますが、今年度の分科会は、8月に各学校が研究発表を受け持つ形で（附属は公開研究会と養教研の分科会を兼ねため、10月の全体会時に発表）行いました。そのため当日は、教育地域科学部1号館の1階と2階の講義室の一部をお借りして8つの分科会を開催させて頂きました。内容は、自閉症スペクトラムの生徒の「卒業後の生活」を考えた支援、不登校の生徒に対する支援、自閉症に対応した教育課程の編成等、行事に参加しにくい児

童生徒に対する支援、性教育、「障害児のきょうだい」に対する支援、児童生徒会活動、卒業後の進路を見据えたネットワークづくりの取り組みなど多岐にわたり、県内の各養護学校から全部で約260名の先生方が参加され、時間一杯、各学校の実践や提案を基に、子どもたち一人一人の教育的ニーズに応じた支援について活発に研究協議（ワークショップを含む）が行われ、盛大な研究会となりました。当日は、福井大学のオープンキャンパスも同じ1、2階で開かれましたが（ちなみに教職大学院の夏季集中講座とも重なりました）、特に混乱もなく、そして大学から視聴覚機器などの物品や学生ボランティアなどの人的な支援を受け、おかげさまで無事、成功裡に研究会を催すことができました。

拠点校・連携校だより

大野市有終西小学校
川端 英郁

本校は、大野市の中心地「亀山」の越前大野城の真下にあり、学校周辺には、名水百選に選ばれている「お清水」や武家屋敷「旧内山家」、400年以上の歴史がある七間朝市が開かれる「七間通り」など、歴史的な見所がたくさんあります。また、今年オープンした観光拠点「結ステーション」「輝センター」が目と鼻の先にあるなど、たくさん観光客が訪れる場所に隣接しています。10月9日、10日には、「結ステーション」を中心に越前大野城築城430年祭のメインイベントも行われ、校区が賑わいの中心にもなりました。

また、本校は、平成18年8月に学びの里「めいりん」に新築移転しました。学びの里「めいりん」には本校の他、大野市生涯学習センター、大野公民館、視聴覚ライブラリーの3つの施設があり、学社融合の複合施設として、大野市民の生涯学習の拠点となっています。子どもたちが学校生活を送っている隣で、市民の皆さんが施設を利用し活動しているわけですから、子どもと大人が常に校内で触れ合うことができるのが本校の特徴です。

このような環境のもと、「地域の風がいきかう学校づくり」を合言葉に、地域と連携した活動を積極的に行っています。各教科や総合的な学習の時間、特別活動など学校教育活動全体を通して、地域の方々と積極的に関わりを持った学習を展開しています。特に総合的な学習の時間では、3年生は「七間朝市」、4年生は「大野の水」、5年生は「米づくり」、6年生は「地域の達人」に焦点を当て系統的に取り組んでいます。地域に積極的に出て



学びの里「めいりん」のパフレット

行くことで、地域の良いところや地域に住んでいる方々の素晴らしさをたくさん学んでいます。学びの里「めいりん」で活動している地域の方々とも積極的に交流を持ち、毎年のように各学年で共に学ぶ授業も行っています。学校支援ボランティアの方（登下校や読み聞かせなど）も、毎日学校に関わりを持ってくださっています。昨年度は1年間で延べ人数約5,000人のボランティアの方が、子どもたちのために活動してくださいました。本当に地域の方に見守られていることを肌で感じることができます。

今年度の本校の研究主題は、「進んで伝え合い学び合う子の育成 ～読解力・活用力を高め、より適切に伝える力を育てる～」です。研究主題「進んで伝え合い学び合う子の育成」は昨年度と同じですが、今年度は、県教委の「コア・ティーチャー養成事業」を受け、PISA型読解力の向上をめざして、国語の授業研究に取り組んでいます。「コア・ティーチャー養成事業」にからみ、全校研を年間5回実施します。全校研を行わない教員も指導主事訪問での公開授業を行います。県指導主事の月1回の学校訪問もあるので、授業研究会や現職教育が国語一色になりますが、この機会をチャンスとして捉え、授業実践力の向上、授業での児童の様子の見取りのスキルアップ、事後研究会の活性化など、継続した取り組みを行っています。さらに、「地域と連携した活動」と「コア・ティーチャー養成事業」を絡め合わせながら、双方向的な地域と連携した活動をめざし、児童も授業に関係した全ての地域の方々も満足することができる、学習の展開についてチャレンジしています。



5年米づくり（稲刈りの様子）

福井市明道中学校 北 典子

本校は、橋本景岳(左内)の啓発録の精神と校訓(自啓・互敬・明朗)の実践をめざした伝統ある校風のある学校です。教育目標をはじめ、生徒会のスローガンにも「明るい挨拶と歌声の響く学校」が掲げられています。

本校では、全校体制で「総合的な学力」の育成を目指した「確かな学力」と「豊かな心」を両輪とした取組を推進しています。「人との関わり方」を大切にした学びや活動を通して、『学びを高め合う自主的・協働的な生徒集団』の育成をめざしています。研究の視点として、

○「知的楽しさ」を共有し合う協働的な学びの場がある授業の充実とともに、習得した学びを活用したり、伝え合ったりして、学びを深める学習活動の充実を図る。

○「確かな学力」を支える連帯感と向上心を持つ学級集団を育てる。

○あいさつと清掃を中心に、良い生活習慣の定着を図る。

○一人一研究授業を公開し、教科内・外で参観しあう。

○授業実践を通して、中学校区教育をより推進する。

そうした授業改善に向けての一人1回(指導主事訪問の授業以外に)の授業公開の実施も定着して3年目になります。可能な限り教科全員が参観し、その週の教科会で授業研究会を持つことと、他教科の授業を積極的に参観することを共通理解しています。「聴き合い、練り合い、伝え合う」協働的な活動のある授業づくりを共通の視点に、他教科の公開授業を積極的に参観して、生徒の学びの様子を見合うことを大切にしています。

3年目となる今年度は、新たに、『教科担当者参観』を位置づけ、同一のクラスの授業を担当する教科担任が、生



徒個々の学びの実態やクラスの学び合いの様子を参観して話し合う授業研修を行っています。時間割を調整しながら『教科担当者参観』の場を設定することで、必然的な教職員間の研修の場が保障されるようになりました。

また、春山小学校と順化小学校と連携した明道中学校区教育研究は、一層推進されてきました。教職員間の授業研究会への参加や日々の授業参観などの研究体制をはじめ、学校行事(合唱コンクール・学校祭)への児童生徒の参加交流は定着しています。今年度は、それに加えて、3校共同の取組として、「学びの月別目標を決め、強化月間の実施」を進めています。具体的な内容を紹介します。

- | | |
|-----|--------------------------------------|
| 4月 | 返事
名前を呼ばれたら、大きな声で「はい」と返事をしよう |
| 5月 | 時計を見て行動 ベル着
時計を見て行動しよう |
| 6月 | 授業の準備
次の授業の準備をしてから休み時間にしよう |
| 7月 | 聞き方
相手の方を見て話を聞こう |
| 9月 | 話し方
みんなの方を見てわかりやすく話そう |
| 10月 | 宿題
宿題をきちんと出そう |
| 11月 | 声の大きさ
全員に聞こえる声で、最後まではっきり話そう |
| 12月 | 聞き方
うなずきながら話を聞こう |
| 1月 | ノート
きれいな字でいいねいにノートを書こう |
| 2月 | 授業前後のあいさつ
心をこめて授業の始めと終わりのあいさつをしよう |
| 3月 | 正しい姿勢
背筋を伸ばして学習しよう |

小中9年間での成長の積み上げを考慮した上で、こうした学びのルールへの定着と「確かな学力」と「豊かな心」を持つ児童生徒の育成をめざしています。右の写真は、9月中旬に実施された「あいさつ運動」の様子です。生徒会主催のボランティア活動であり、自主参加です。



坂井市立長畝小学校 多田 敏明

本校は坂井市東部（坂井市丸岡町松川）に位置し、周囲には田畑が広がり、近くには里山（味岡山）があり、夏にはホタルが飛び交う五味川が流れる自然が多い地域です。クラス数は14クラス、児童数393名の中規模の小学校です。今年度からは竹田小学校と統合し、校区は更に広くなりました。児童は全体的に明るく素直で、学習や行事などにも一生懸命に取り組んでいます。

昨年度より、校内研究テーマ「いきいきと活動する長畝っ子」を掲げ、教職員一致協力し教育活動に取り組んでいます。また、福井大学教職大学院連携校にもなり、大学院の先生方（石井恭子先生、木村優先生）と連携しながら校内研究の活性化をめざして実践を進めています。

校内研究の一つの実践としては、昨年からの「実践ワークショップ」という企画を立ち上げました。各自の普段の実践を小グループ内で紹介し合い、意見交換をし



たり、情報を共有したりする目的で始めました。校長や教頭の管理職から、栄養教諭や養護教諭、事務職まで全職員が自分の普段の実践をレポートにまとめて紹介し合うものです。今まで行ってきた効果的な指導や現在抱えている課題など、グループ内でそれぞれ話題を提供し、それを基に参加者全員が意見を出し合いながら他者の指導方法や考え方を知ったり、自分の実践をふり返ったりしています。ワークショップには、大学院の木村先生や石井先生にも参加してもらい貴重なアドバイスもいただきました。

授業実践では、他者との連携授業が広がっています。職員同士の連携や地域の方、企業の方、他校の先生などといういろいろな形で行っています。主な実践を紹介します。

○理科と食育との連携授業（6年：理科）

「人のからだづくり」の単元では食べ物の消化と吸収を学習します。その発展的な授業として、吸収された栄養分の行方とそのはたらきについて、担任と栄養教諭がT・Tで具体的に指導しました。子どもたちは、消化された食べ物が体にどのように役立っているのかを知り、食べることの大切さも学ぶことができました。

○自治体との連携（5年：社会科）

社会「自動車工業」の学習の中で、地元の坂井市生活環境課と連携し「電気自動車と環境」の授業を行いました。市役所の担当者から電気自動車のしくみや



市の環境に関する取り組みを聞き、環境にやさしい自動車や自分たちができる環境への取り組みについて考えることができました。

○地域との連携（2年：生活科）

地域の祭り「のうねの郷まつり」に向けて、地域の指導者を招いてエコキャンドルの作成を行いました。作成したエコキャンドルは、祭りのイベントとして当日親子で点灯し、行事の盛り上げに一役かいました。



○他校との交流授業（4年：総合的な学習）

教職大学院の院生同士のネットワークから、本校の児童と春江工業高等学校の生徒との交流授業が実現しました。

今年の夏に完成した「竹田水車メロディーパーク」を基にした地域学習の一環として、メロディーチャイム

を作製している春江工業高校の生徒と交流しました。高校の先生や生徒たちの配慮により、児童はメロディーチャイムのことだけでなく、他の製作物を見学したり操作したりして機械のしくみや物づくりにも大変興味をもつことができました。



このように各学年それぞれの特色を生かした取り組みが進められています。他者と連携することにより、互いに意見や思いが交流できたり、複数の視点で子どもたちを捉えたりすることも可能になってくると思います。こうした活動によっても授業改善が進められるのではないかと考えています。

福井県特別支援教育センター 西尾幸代・大崎忠久

1. 当センターの取組

福井県特別支援教育センターは、昭和58年に県立病院関連施設の1つとして開設され、特別な教育的ニーズのある子どもたちの相談や指導を行う教育機関です。現在、12名が指導主事として勤務しています。開設当時より、医療・福祉・労働・教育の各関係機関や各市町の教育委員会との連携を大切にしてきました。

当センターでは、子どもたちの育ちを支える保護者や教員のために、電話相談や来所相談、あるいは園や学校への訪問相談を行っています。昨年度の教育相談は1,412件、延べ相談回数は9,079回であり、近年、急激に相談件数が増加しました。当センターの相談のほとんどが園や学校への訪問相談であり、全国的にも珍しく「現場」に密着した相談を展開しています。授業や学級の様子なども直接参観できるので、より具体的に支援の手立てについて話し合うことができます。他に幼児や小・中学校の通常学級に在籍している教育的ニーズのある児童生徒を対象に、所員が直接子どもにかかわりながら相談に応じていくこともあります。

また、当センターでは特別支援教育の理解推進に向けた研修を行っています。保育士や全校種の教職員、各関係機関の職員を対象に今年度も16の研修講座を開き、延べ1462名が受講されました。他に園や各学校の教職員や支援員、あるいは保健師や保護者を対象に、所員が直接出向いて研修会を行っており、昨年度は2449名が参加しました。

さらに、各学校の校内支援体制づくりについての研修にも力を入れています。各学校の特別支援教育コーディネーターを対象に、所員が研修者の学校の相談ケースにかかわりながら、一緒に校内の支援体制づくりを支援する実践的な研修を行っています。この研修では各学校の取組について情報交換や小・中・高連携の現状と課題を話し合う機会もあります。また、特別支援学校のセンター的機能を推進するための研修や研究協議会も開催しており、当センターは福井県における特別支援教育体制づくりの一翼を担っています。

当センターでは、上記の取組について県全体としてさらに特別教育支援を推進させていくために、嶺南教育事務所特別支援教育課とも協力しながら、県下を「福井」「坂井・奥越・吉田」「丹南」「嶺南」の4つの地区に分けて、地区での課題や状況についても話し合いながら取り組んでいます。

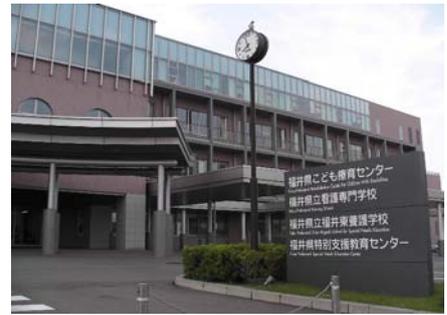
2. 当センターの研究活動・所内研修研究活動

は、開設当時から福井大学の先生方に指導・助言をいただきながら取り組んできました。毎年、4～5の研究テーマを掲げてグループで取り組んでいます。教職大学院の拠点校になってからは、福井大学の先生方から月1回は指導・助言をいただいています。これらの研究は、当センターとして取り組むべき課題を明らかにするだけでなく、県内の特別支援教育の課題とも深く関係しているものであり、今後の方向性を考える機会にもなっています。

特別支援教育がスタートして4年、発達障害の理解や校内支援体制などを整える「特別支援教育の理解・啓発期」から、授業づくり・学級経営なども含めた具体的な支援を行う「特別支援教育の充実期」への転換を迎えています。そのためには、更なる所員の力量アップや今後の方向性を図るための話し合いが必要になっています。その一方で急激な相談件数の増加や業務内容の多様化が進み、所員同士で自分の取り組みについて語り合ったり、共有したりする時間の確保が非常に難しくなっています。

今年度は、例年よりも所内研修の内容を充実させたり、自分たちの業務や取組について語り合ったりすることを重視しています。時代の要請に合わせて、当センターの向かうべき方向と役割についても考えていかなければなりません。保護者や園・学校からの相談に追われる日々ですが、やはり、自分たちの取組を振り返り、省察し、話し合うことはとても必要です。私たち所員も協働・チーム支援が欠かせません。

当センターでは、平成23年2月10日(木)に県立図書館にて、特別支援教育に関する具体的な取組の研究成果を伝え合う「研究発表会」を開催する予定です。多数のご参加をお待ちしております。



特別支援教育コーディネーター研修

10/29

(金) 9:20-16:50

福井市至民中学校第3回公開研究会

学びと生活の融合

—異学年型教科センター方式を運営する—

〒918-8032 福井市南江守町 65-20
TEL 0776-35-3840 FAX0776-35-8012
<http://www.fukui-city.ed.jp/shimin-j/>
E-mail :shimin-j@fukui-city.ed.jp

11/2

(火) 13:15-16:30

坂井市立丸岡南中学校自主研究発表会

学び合う環境の創造 (2年次)

〒910-0355 坂井市丸岡町高瀬 15-2
TEL 0776-67-7722 FAX0776-67-7122
<http://www.maruokaminami-j.ed.jp/>
E-mail : info@maruokaminami-j.ed.jp

福井市豊小学校自主研究発表会

共に学び合い、くらしに生かす子どもたち
～見通しをもち、学びを活用できる子をめざして～

〒918-8011 福井市月見 3-9-1
TEL 0776-36-3802 FAX0776-36-3803
<http://www.fukui-city.ed.jp/minori-e/>
E-mail : minor-e@fukui-city.ed.jp

11/10

(水) 13:00-16:30

福井大学教育地域科学部附属小学校
第36回教育研究会 (第2次案内)

協働して学びを深める授業をつくる

〒910-0015 福井市二の宮 4-45-1
TEL 0776-22-6891 FAX0776-22-7580
<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-e/index.htm>
E-mail : fuzoku-e@f-edu.u-fukui.ac.jp

12/3

(金) 12:40-16:55

<福大教職大学院の紹介・引用等のリスト>

以下の文献の中で、福井大学教職大学院の紹介がされています。

- ・『内外教育』2010年7月23日「教育長はこう考える」広部正紘福井県教育長
- ・『平成21年度 文部科学白書』コラム紹介(教職大学院での実践的指導力を備えた教員の育成—福井大学教職大学院の取組—)
- ・鈴木寛『「熟議」で日本の教育を変える』小学館, 2010年9月, pp.177-178。
- ・勝野正章「第3章第4節 教師教育改革の課題と挑戦—教師教育の実践共同体の創出に向けて」喜多明人・三浦孝啓編『「免許更新制」では教師は育たない』岩波書店, pp84-88, 2010年8月。
- ・鈴木寛副大臣インタビュー「教員養成の主要部隊は大学院に移行—学部卒で基礎免許, 一般免許は大学院で—」『Synapse』創刊号, ジアース教育新社, 2010年10月号

